

## コミュニティソーシャルワーカーの役割に関する一考察

## —釜山市 A 総合社会福祉館における実践を通して—

○ 中京大学 中田雅美 (4712)

キーワード：コミュニティソーシャルワーカー・社会福祉館・制度の狭間

## 1. 研究目的

本研究では、韓国釜山市内にある A 総合社会福祉館におけるソーシャルワーカーたちの実践に着目する。筆者は、韓国の総合社会福祉館のソーシャルワーカーは、コミュニティソーシャルワーカーであると考えている。総合社会福祉館における取り組みを通して、コミュニティソーシャルワーカーが地域で役割を発揮できる要因について考察したい。

野村総合研究所の調査研究事業報告書（2013：7）では、コミュニティソーシャルワーカーを「名称・呼称は問わず、①小地域単位で担当し、②制度の狭間の課題も含めて、個別支援と地域の社会資源をつなぎ、③地域特性に応じた社会資源やサービスの開発を含めた地域支援を行う役割を担っている人」と定義している。厚生労働省が実施した調査（2017：12）でも「[個人・家族への働きかけ]は、概ねどの施設・機関でも、実施率が高い。（略）それに比べて、[地域への働きかけ]は、実施率及び力量を有していると回答しているもの、ともに期待していたほどに高い水準の結果とはならなかった」と指摘されている。ソーシャルワーカーによる[地域への働きかけ]はなぜ進まないのであろうか。本研究では、総合社会福祉館における実践を通して、どのようにすれば日本でコミュニティソーシャルワーカーが活躍できるかを考えたい。

## 2. 研究の視点および方法

韓国社会福祉館協会によると社会福祉館は、「地域社会を基盤に一定の施設及び専門人材を備え、地域住民の参加と協力を通して地域社会福祉問題を予防し、解決するための総合的な福祉サービスを提供する施設」と定義されている。その設立（中田：2017）は1906年までさかのぼり、セトルメント事業の拠点として取り組まれてきた経緯がある。1989年には低所得者層の賃貸アパートに社会福祉館の設立が義務化され、2024年現在、韓国国内に481か所の社会福祉館がある。

本研究で取り上げる A 総合社会福祉館があるのは、釜山市 S 区で、人口は約30万人である。S 区には5つの総合社会福祉館があり、A 総合社会福祉館の対象とする地区は、X 洞1・2、Y 洞1-4の6洞に暮らす約5万人である。A 総合社会福祉館が立地するのは、X2 洞で、釜山市内にある30か所ある貧困地のひとつであり、タルトンネ（달동네）と呼ばれる急斜面の高いところに困窮者が集まって暮らす住宅密集地がある。2009年には、釜山のアーティスト集団と大学の研究者、行政職員らが X 洞の景観的特徴に目を付け、それを地域再生・活性化に活用することを思いつき（高：2015）、パブリックアート推進委員会により2度[マウルアートプロジェクト]に選定されている。

筆者は、2004年より韓国国内の総合社会福祉館に訪問調査する機会を得、A 総合社会福祉館には、2016年から3度（2016・2023・2024年3月）の訪問調査を行っている。訪問調査では、通訳とともに研究者を伴い、主にタルトンネを中心とした地域踏査、A 総合社会福祉館に勤務するソーシャルワーカーによる事業説明、資料提供を受けた。

### 3. 倫理的配慮

本研究で使用するすべてのデータは個人を特定するものではなく、対象となる地域及び総合社会福祉館の事業に関するデータを収集・分析したものである。また調査研究にあたっては、日本社会福祉学会研究倫理規定に基づいて行っている。利益相反はない。

### 4. 研究結果

訪問調査の結果、A 総合社会福祉館の対象者は、「制度の狭間に落ちてしまう個人」とのことであった。つまり、生活上の何らかの困りごとを抱えているが、社会保障制度等の制度の対象者ではない人たちということである。A 総合社会福祉館の立地も、30ある貧困地域の1つであり、対象者が焦点化されている。しかしながら生活課題は集積されやすく、複合化されやすい。そのためA 総合社会福祉館の実施する事業は非常に多岐にわたる。

2016年の訪問時には、ソーシャルワーカーが11名在籍し、事例管理、生活支援サービス、地域組織化を行っていた。具体的には、個人の生活費・医療費・奨学金などの支援、家屋の修理、ハングル教室、無料でも食事の提供ができる食堂の運営、小さな図書館や屋上の畑などもあった。食堂には1日に120名、計300名が利用しているとのことであった。

コロナ禍を経た2023・2024年には、ソーシャルワーカーが13名在籍し、継続して食堂やハングル教室、生活費・奨学金等の支援などを行っていた。そして孤独死のリスクを下げることを重点目標とし、①事例管理を経た健康管理として、地域の中に保健室を設置し、健康管理や運動ができる場所、②タルトンネの最上部に個人で利用できる健康器具の設置、健康管理やニーズを表明できるポスト等がある拠点、③医療機関を退院した後にすぐ自宅に戻れない場合に短期間宿泊できる「ケア安心住宅」が開設されていた。

タルトンネを有する当該地域は、アートプロジェクトによって観光地として収入が増えたが、地域住民には影響していないという。ソーシャルワーカーは「貧困が観光化されていて情けない」と述べ、地域住民の収入源となるようなアイデアを持ち、住民にどう還元できるかを考える必要があると語られた。

### 5. 考察

日本において、コミュニティソーシャルワーカーは個別支援・地域支援・仕組みづくりをすべて行い、複雑化・多様化した課題を抱える人に対応することが求められている。一方で、総合社会福祉館は貧困地域などエリアを選定して設置され、ソーシャルワーカーは、制度の狭間に落ちてしまう個人に焦点化して実践を展開していた。A 総合社会福祉館のソーシャルワーカーは、丁寧に個人の暮らしを支え続けることを通して、必要な社会資源をつなぎ、新たな資源を開発していた。ニーズを持つ全ての人に対応しようとする、地域への働きかけを単独で展開しようとするものの限界を示唆している。

- ・ 韓国社会福祉館協会：한국사회복지관협회 <https://kaswc.or.kr/> (2024年6月17日閲覧)
- ・ 高台泳 (2015)「地域再生におけるグラフィックアートの意義と可能性に関する調査研究 韓国・釜山の事例を中心に」神戸芸術工科大学紀要『芸術工学2015』2015-11-25
- ・ 厚生労働省 平成28年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金(2017)『地域における包括的な相談支援体制を担う社会福祉士養成の在り方及び人材活用の在り方に関する調査研究事業』
- ・ 中田雅美 (2017)「地域を基盤としたソーシャルワークの展開に関する一考察－韓国社会福祉館における実践分析を通して－」北海道地域福祉学会『北海道地域福祉研究』第21巻,1-14
- ・ 野村総合研究所 (2013)『コミュニティソーシャルワーカー(地域福祉コーディネーター)調査研究事業報告書』